

「農家のリノベーション」設計=フェルテスベネド・アルキテクツ

新たな農村建築に向かって

フランチェスカ・セッラザネッティ

参照 | 本誌pp.6-15

この小さな住宅のリノベーションは、ガリシア州農村部の伝統的特徴を再生することへの関心を、新築部分に向けられたディテールへの配慮とともに、明示している。オスカル・フェルテス・ドビコとイアゴ・フェルナンデス・ベネドの建築設計事務所は、ラ・コルニーニャとビゴを拠点に約5年前から活動し、この注意深い研究を理論と設計の両面から進めている。ミラフローレスは、リア・デ・ムロス・イ・ノヤ湾を囲む海岸からほど近い、小さな集落である。ノヤは大西洋に面したリアス・バイシャスの最北地点だ。ガリシア地



改修前の農家



左に改修ブロック、右に新築ブロックを見る

方特有の細長い入り江は、地盤の下降と渓谷内まで海が侵食したことで形成された。

石造の家々と穀物庫が、農業で栄えた過去を今に伝える。かつては、空積みの石壁で分けられた農地が、湾へと降りる丘の斜面に沿って広がっていた。リノベーショ



メイン・エントランス



新築ブロックの海側開口部



第2ブロック:上下階を結ぶ通過スペース



階段よりリビングエリアを見る



第2ブロックと新築ブロックの境界エリア

ンの対象となった住宅は、3つのボリュームで構成される。1つめのボリュームは、石積みの擁壁に嵌め込まれ、斜面にへばりつくように建っている。かつて豚小屋だったが、粗野な状態を維持したまま再生された。壁も床やベンチも、もともとの石のブロックが保存され、頭上から光が射す内部は、内と外、納屋と住宅とのある種の中間地帯となった。2つめのボリュームには住宅の核が置かれた。元の石壁に嵌め込まれた古いキッチンのうち、古い薪窯と、石で囲まれた食料貯蔵室——伝統的な天然の冷蔵庫——が残された。後に増築された3つめのボリュームは、農具やトラクターの保管に使われた小屋だった。これは取り壊されて、打ち放しコンクリートの新しいボリュームに替えられ、隣棟の石壁に接ぎ木された。

2つめと3つめのボリュームの接続は、入口扉のデザインによって解決された。ディテールまで細心の注意を払って最初に構想された要素である。既存の石壁と連続するように石材を配置し、その楣式構造は裏側のパネルを隠すようデザインされた。さらにこのパネルは、コンクリート造のボリュームを支持している。

1つめと2つめのボリュームの石造ファサードは元來の開口部が維持されたのに対して、新築ブロックは入り江の眺めに面して広い窓が開けられ、周囲の風景と対話する。屋外部においても、その空積みした石壁からかつての建物の輪郭が分かる。新しい部分は、屋外と屋内の関係に合わせたアクセス口(メイン・エントランスと2ヶ所のドア)に呼応した3つの小エリアのコンクリート舗床に見いだせる。設計案の主たるアイデアは、3つのボリュームすべてをつなぐトタン屋根の連続性にある。屋根には大きな違う円形トップライトが3つ開けられた。

既存の要素を尊重する姿勢は、素材と施工のディテールへの細やかな配慮によって、新築部分と結びつく。こ

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。

©2020 Arnoldo Mondadori Editore

©2020 Architects Studio Japan

「カン・リロ」設計=オーレ・アルキテクテス+カルレス・オリバー

即興と解体 フランチエスカ・セツラザネットィ

参照 | 本誌 pp.24-31

カン・リロは、多層的に解釈できるものとしてリノベーションを捉える方法の表出である。「未完のもの」に共通の美学を表明するにあたり、このプロジェクトは手仕事と職人技術への注目と、サステナビリティへの適性のいずれも明示した。環境に優しい地元の資源の活用と結びついた、時に即興的な解の案出が、真のミッションになった。気候危機が進む現状における抵抗の試みである。オーレ事務所はこのような意図を要約して、自らの創作理念を「作らない/解体する」と定義した。こうして不要な資源を節約する中で、加えるより取り去り、引き算によって過去の技術や素材を再び可視化する意志を示した。本プロジェクトの経緯はある家族の物語と、特にリロ家のカフェ

テリアと結びついている。この建物は当初、2軒の住宅と2つのパティオから構成されていた。それはファサードの高さの違いに見て取れる。1950年代からパン焼き窯が置かれ、80年代からバルになると、日常生活においても聖アントニウス祭の間も、人々が通い集うカリスマ的な溜まり場になった。

今回のプロジェクトによって、屋内はコンサート・ホールとして使えるように改築され、この場の歴史に手を加えてその痕跡を可視化した。建築的介入は本質的な部分に縮小され、機能上の要求に役立てられた。動線の再考によって、現行法規に合わせて空間は最適に利用され、コンサート・ホールの音響機能が適正化された。新たにカウンターを設けて、キッチンの中央ブロックが再編された。この工事が動線を刷新する第1歩となり、当初ファサード側にあったトイレの移動という、別的小規模だが必要な工事につながった。こうしてファサードが修復され、新しく大きな窓ができたことで、屋内に光が入り、道路とつながった。

ホール/バルのトイレ工事には、古い焼き窯の解体で出た廃材が再利用された。煉瓦は側壁に、鉄板は木造の軽構造と組み合わせて天井に使われた。

焼き窯があったゾーンには、コンサート・ホールのステージが作られた。新たな用途に合うよう背面が閉じられ、柱を取り外し、新しいビームが設置された。内部再編における最後の実質的な改変となったのが、以前は美容室として賃貸に出していた空間の組み入れである。この空間とホールを連絡する新たな開口部は、本プロジェクト全体を特徴づける「未完成」の表現として、仕上げなしの粗い壁面が剥き出しになっている。新しいホールには、車道側に身障者用エントランス、隅部にメイン・エントランスが置かれ、旧来のファサードを残すことができた。

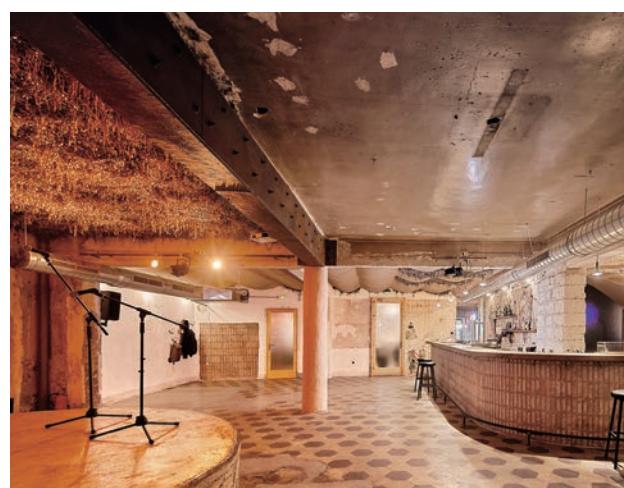
修改築計画のもうひとつの重要な領域は遮音の必要に関わるもので、素材の新たな使い方を考案した多様な解が出された。まず、ファサードの内壁は、現地の工房で製作された煉瓦を使った二重の組積仕上げとされた。



街路側ファサード



キッチン



コンサート・ホール: 左にステージ、右にカウンターを見る



コンサート・ホール: 曲線を描く天井パネル



バル・スペース

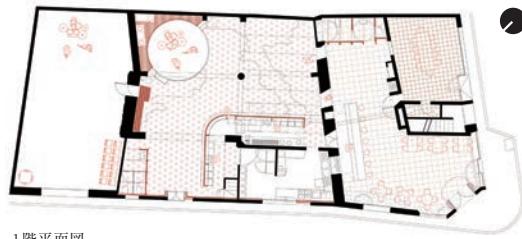


コンサート・ホール: カウンターに向かって見る

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。

©2020 Arnoldo Mondadori Editore

©2020 Architects Studio Japan



1階平面図

これは通常アーチの施工に使われる煉瓦で、台形のフォルムを活かして内壁に「鱗状」に配置する新たな解釈によって、音響が向上した。

2つめの領域は屋根の断熱に関するもので、その2つの解が内部空間を視覚的に特徴づけている。それが粘土パネル(伝統と異なり、曲げて使うことでコンサート・ホール全体を湾曲させる成果を得られる)と、ステージ・エリア上部に、島の海岸で集めた海草を乾燥させたブロックを使うことだ。この選択は、現地の物質文化と結びついたサステイナブルな解を探す可能性を示唆する。海草は「(生育地の環境条件を知る)指標植物」で水質汚染管理の指標(水温33度以上で死滅する)となるだけでなく、海岸に堆積すると天然の障害物となって、崩れやすい砂丘を波から保護する。

素材の配置への気配りから見えるのは、素材の表現力を深く追求する姿勢だ。一見して些末な要素も、コンサート・ホールからパティオへの通路に寄り添う低い壁のように、組積仕上げと連続ジョイントの発明へのオマージュとなっている。シーガルド・レヴェレンツの仕事への称賛から生まれたオマージュだ。特に彼の聖マルコ教会(ストックホルム、1956-60)は、煉瓦と、わざと粗く剥き出しにされたモルタルの帶との色のコントラストが強調された作品だ。

本作では数多くのディテールが、引き算と最小限の改築を経て、過去に使われた素材と名もなき技術を浮かび上がらせる——剥き出しの壁、旧来の床の縫合、取り外された天井の木材の残骸、あるいは再び日の目を見た古い石膏プラスター。

作品:カン・リロ

設計:オーレ・アルキテクテス+カルレス・オリバー

協働者:Joris Meno

エンジニアリング:Cubic Consultoria

構造:Alfons Romero | 建築主:リロ(Liro)家

規模:延床面積 250m² | スケジュール:竣工 2019年

所在地:Manacor, Maiorca, Islas Baleares, Spain

「ペッリッツァーリ製作所内の建築設計事務所」

設計=AMAA

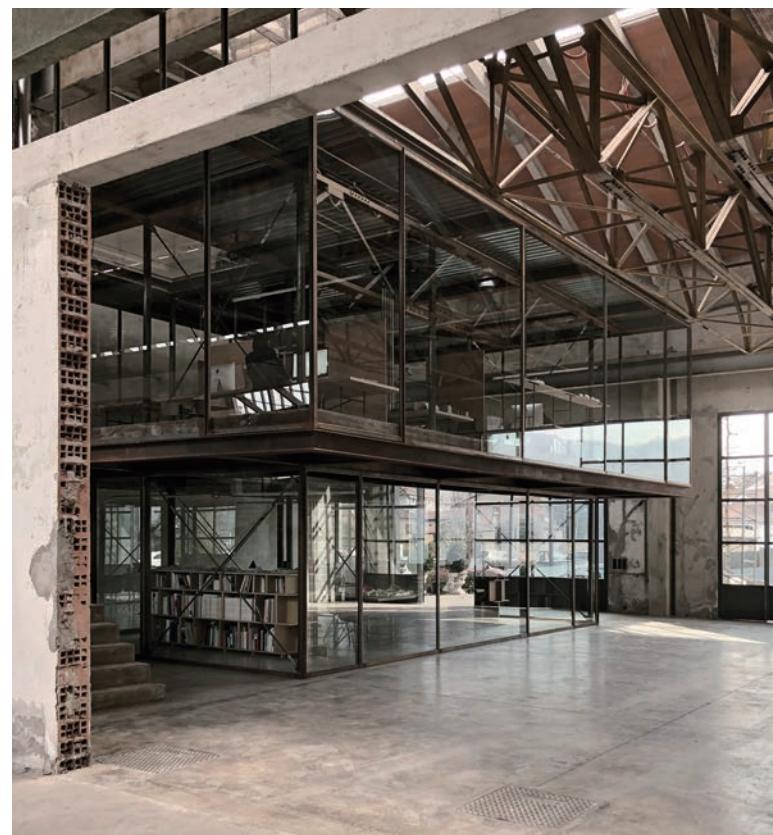
ポンプ工場からアイデア発信地へ

フランチェスカ・キオリーノ

参照 | 本誌 pp.32-39

1950年代にペッリッツァーリ製作所は3,000人を超える従業員を擁し、ヴァルダニョのマルツオット社とスキオのラネロッジ社に次ぐ、ヴィチェンツァ県で第3位の労働力を誇った。1902年の創業以来、この金属加工会社はポンプやエンジンの冷却ファンの製造で知られ、20世紀前半に途切れのない成長を遂げて、ヴェネト地方都市の街並みに重大な影響を与えた。今回掲載するプロジェクトは、AMAA建築設計事務所によるものだ。これは旧工場地帯のBゾーンを対象とする大規模な再開発事業に含まれ、その一部は同事務所の設計で商業・サービス産業へのコンバージョンが行われた。ペッリッツァーリ社がアル

ツイニャーノに及ぼした影響は経済的、空間的なもののみならず、社会的、文化的なものにも及んだ。創業者のジャコモ・ペッリッツァーリは、イタリア家族経営企業の良き伝統に倣って製作所の敷地内で生活した。また息子アントニオとともに従業員たちの社会文化生活に気を配り、ドーボラヴォーロ、職場クラブ、映画館、社宅など、要するにアドリアーノ・オリヴェッティのヴィジョンの中で重きをなしたあの共同体を整備した。今日まで、その洞察力あるヴィジョンの一部が残されている。地元の若手建築設計事務所として、都市の一画に介入するチャンスを手にすることは、アイデンティティに関わる非常に高い価値があった。さらに、このプロジェクトは必然的に企業の生産力を牽引する。AMAA研究開発共同建築事務所は、2012年にマルチエッロ・ガリオットとアレッサンドラ・ランパッソによって設立されて以来、国内外の設計競技に間断なく挑戦してきた。すでにヴェネツィアのサンタ・クローチェ修道院改築を完遂し、2015年のバルバラ・カポキン賞にノミネートされた。同年に、産業遺産の再評価を目指すフェデリコ・マッジャ賞の



スタジオ全景



2階スタジオ



地階の水廻りエリア

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。

©2020 Arnoldo Mondadori Editore

©2020 Architects Studio Japan

「アルキペラゴ現代アートセンター」

設計=ジョアン・メンデス・リベイロ、クリスティナ・ゲデス、
フランシスコ・ヴィエイラ・デ・カンポス

虚飾でも挑発でもなく マルコ・ムラツツアーニ

参照 | 本誌pp.60-75

アルキペラゴ現代アートセンターは最新作ではない。だからと言って、本作を論じ直さない理由にはならない。成功した作品がそうであるように、アルキペラゴも時の経過の影響をよく周縁的にしか受けなかったため、本号で再利用のテーマを取り上げようと決めた時から、読者の関心を本作に向けるまたとない機会と思われた。再利用は多様な意味で捉えられ、建築家たちのエネルギーを次々と結集しているテーマだ。

アルキペラゴ現代アートセンターの出発点は設計競技だった。ジョアン・メンデス・リベイロ、クリスティナ・ゲデス、フランシスコ・ヴィエイラ・デ・カンポスという実務経験が豊富で確固たる学術業績のある建築家たちが、2007年に第1等に選ばれた。2011年から2014年までの施工で建物が完成し、アゾレス諸島のサン・ミゲル島リベイラ・グランデにある約13,000m²のエリア——そのうち3,100m²は屋外——の再開発計画が完了した。サン・ミゲルは群島最大の島で、リベイラ・グランデは、ポルトガルに属すこの地域



全景: 街路より見る



北西より既存棟群を見る

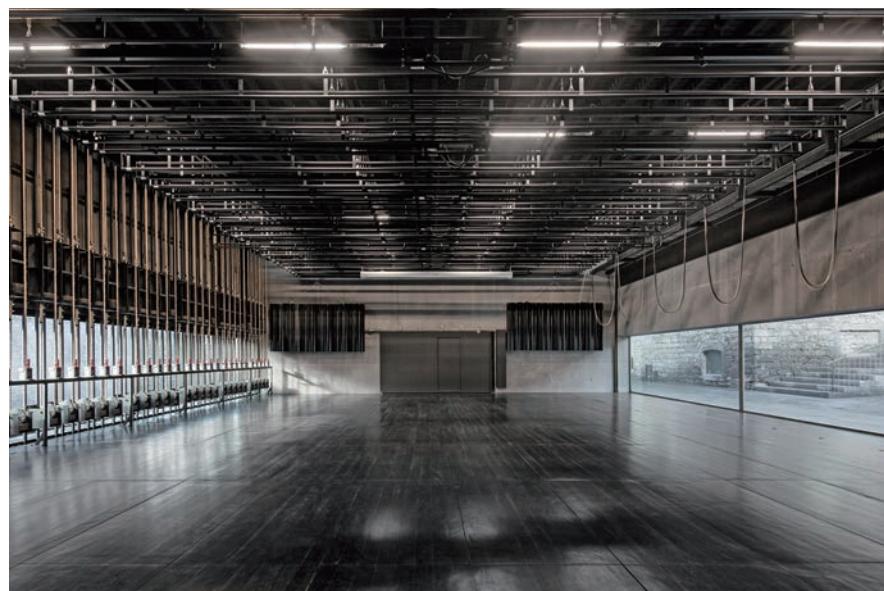


中庭: 左にブラックボックスを見る

の主要都市ポンタ・デルガダの反対側に位置する。アルキペラゴの竣工とともに、1800年末に始まった歴史が幕を閉じた。すなわち、サン・ミゲル島で農業改革の効果が記録され、最初のアルコール工場が作られた時だ。後に煙草の生産施設も加わった。これらの生産活動が中止された後、工場の建物はアゾレス自治地域に買い上げられ、2007年に文化センターにコンバージョンする設計競技が告示された。

メンデス・リベイロ、ゲデス、ヴィエイラ・デ・カンポスが解釈した機能的プログラムは、行政が発案した本プロジェ

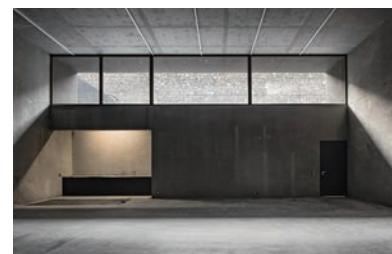
クトがいかに独創的で野性的かを証明している。サン・ミゲル島の住民数が約15万人なのに対して、リベイラ・グランデの人口が3万人を少し超える程度であることを踏まえると、この特異さがさらに増す。アルキペラゴ現代アートセンターは、実質的に機能の異なる4つの核から構成される。ひとつは収蔵庫と付属の作業室。2つめはアーティストのためのスタジオと住居とされ、レジデンスの芸術家たちが展示空間と密な関係を作れるように、また観客が彼らの制作環境を直接体験できるように設計されている。既存建物の中央に位置する3つめの核には展示



ブラックボックス



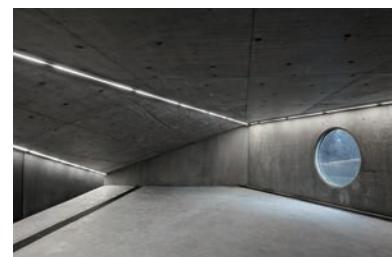
エントランス・コート



ワークショップ



チケット売り場



防音スタジオ